

ナスカの地上絵研究の最先端

山形大学 人文学部 教授
坂井正人



研究の背景

南米ペルーの「ナスカの地上絵」は、ユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されている遺跡で、特にハチドリやサルなどの動物の地上絵が有名です。1920年代に発見されて以来、この遺跡は諸外国の研究者によって研究されてきました。その結果、地上絵には動物のほかに、直線や幾何学図形があることが分かりました。ただし、これらの地上絵がどこに、いくつ分布しているのかという点が十分に調査されないまま、実証的なデータに依拠しない議論が横行してきたのも事実です。

地上絵が描かれたナスカ台地は、東西20km・南北15kmと広大です。また、この台地には膨大な数の地上絵が描かれています。そのため、地上絵の分布状況を把握するには、手間とお金がかかるため、これまで敬遠されてきました。

研究の成果

こうした状況を打破するために、我々は人工衛星から撮影されたナスカ台地の画像を分析し、地上絵の分布図を作成しました。さらに、この分布図を検証および修正するために、現地調査を実施してきました。その結果、我々は新しい地上

絵を100点以上も見つけることができました。また地上絵の付近にあった土器を分析したところ、ナスカ台地における地上絵の制作は、パラカス後期（紀元前400年～紀元前200年）まで遡れることが判明しました。

またナスカ台地には、近くの山に降った雨が激流となって流れ込んだ水の跡が多数確認できます。我々の研究によって、ナスカ台地にはこのような水害の影響を受けやすい場所と受けにくい場所があり、こうした土地条件を考慮した上で地上絵が建設されたことが明白になりました。

今後の展望

地上絵および周辺の遺跡に関する基礎的なデータ（分布・年代・景観など）をさらに集めるとともに、これらのデータを学際的な視点から分析します。それによって、地上絵で、どのような活動が行われていたのかを実証的に研究することで、地上絵の実態に迫りたいと考えています。

関連する科研費

平成21～25年 新学術領域研究（研究領域提案型）
「アンデス文明の盛衰と環境に関する学際的研究」



図1 新たに発見した地上絵(2006年)

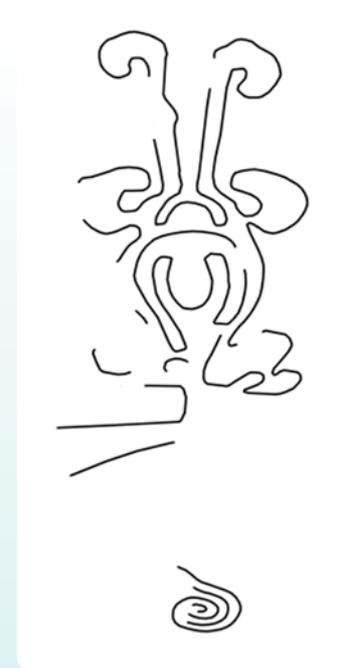


図2 図1地上絵の図版

(記事制作協力:日本科学未来館科学コミュニケーター 五十嵐海央)